

三浦三浦

友が逝き春一番が荒狂う
麻雀の卓を囲みて春うらら
草餅をほおぼりメタボ考える
保津川に緑彩る桐の花
心太すする口元愛らしい
冷麦の色を争う子らの箸
夕立に浴衣の裾をたくしあげ
稲光夜空裂き分けいずこへか

秋深し夜食のうどんなつかしく
丹沢が夕焼けに映える七五三

.....

私が本句会に入会したのは二〇〇七年三月二三日で、所謂中途入会である。以前よりその存在を承知していた。飛び込むことを躊躇っていた。俳句に対する興味はかなり以前に、神保町を散策していた時、季語の冊子を購入した経緯があることから多少なりともその感があった。どうかかえる。入会二年を経たが出席率も悪く句に進歩も見られない、ルールにも疎い不良会員の最たるものである。レッドカードをいつ出されるかとひやひやものである。それでも参加するのは、幹事をはじめ、参加各氏が親切にも迎え入れてくれ、各位の心情を反映した句に触れ、新たな気持ち齎してくれるからであらう。私は出来るだけ易しい表現で素直に感じたことをあらわしてゆきたいと考えております。最後に病に伏せられてリハビリに取り組ぶ主宰に早期回復のエールをおくりたい。